

# 考古学の資料から新たな日韓交渉史と時代像をつくる

福岡大学提供  
作成日 2016年3月6日  
更新日



## 研究者氏名

たけすえ じゅんいち  
武末 純一

## 所属機関

福岡大学人文学部

## 関連キーワード(複数可)

集落構造、渡来人、方形環溝、韓半島の倭系遺物、日本列島の韓半島系遺物

## 主な研究テーマ

- ・弥生・古墳時代の集落に関する研究
- ・弥生・古墳時代の日韓交渉に関する研究

## 主な採択課題

- ・基盤研究(C)平成14～16年度(配分総額:2,500千円)  
課題名「韓国無文土器・原三国時代の集落構造研究」
- ・基盤研究(C)平成17～18年度(配分総額:2,500千円)  
課題名「百済集落の研究」
- ・基盤研究(A)平成20～23年度(配分総額:34,190千円)  
課題名「日韓集落の研究-弥生・古墳時代および無文土器～三国時代-」
- ・基盤研究(A)平成24年～28年度(配分総額:43,160千円)  
課題名「日韓交渉の考古学-古墳時代-」

## ① 科研費による研究成果

・日本側の日韓交渉史研究は、韓国側の成果のつまみ食いが多いため、韓国側の視点での全体的な検討を目指した。まず、「韓国無文土器時代・原三国時代の集落構造研究」では韓半島南部の集落を検討し、松菊里遺跡の中心部に首長層の区画があると予測した。その後、大型掘立柱建物を囲む方形環溝が発見され、証明された。

・「百済集落の研究」では王城の様相とともに、一般集落のうつりかわり、大型六角形住居を首長層が用いるなどの独自性を明らかにした。

・「日韓集落の研究」では上記の二研究を踏まえて、日韓両国の研究者45名が携わった。まず北部九州に朝鮮半島の無文土器時代前期からの円形環溝集落と朝鮮半島東南部の松菊里型住居が伝わって弥生時代がはじまり、次に無文土器時代中期後半以来の方形環溝集落が、三雲下西遺跡をはじめ日本に伝播して、古墳時代の首長層居宅へと発展する様相を示した。

・「日韓交渉の考古学-古墳時代-」では、1年に1回、金属製装具、馬具、武器・武具と農工具、土器・鉄器生産と集落の順で日韓の共同研究会を開き、さまざまな鉄器は多く受容されたが、製鉄技術は伝わらないことを明らかにした。また、朝鮮半島には軍事的な倭人もおり、北部九州の池ノ上・古寺遺跡では須恵器を作り馬の飼育や灌漑水路の掘削に従事した加耶系の人々がいたことなど、両地域での渡来人の役割を解明している。

## ② 当初予想していなかった意外な展開

・日本列島の各地域の考古学研究者と韓国の考古学研究者とに深い結びつきが生まれ、両国でのさまざまなシンポジウムに若い人が呼ばれるようになった。

・古墳時代にも海上交易を担った海村があったことが分かってきた。

・製鉄のように重要であるが、日本にそのまま伝わらなかった技術があったことが分かった。

## ③ 今後期待される波及効果、社会への還元など

・起源地がこちらだから優位に立つというような考えが日韓両国で払拭され、冷静かつ客観的に交渉史を叙述できるようになる。古墳研究に偏って歪められた古墳時代像を、カマドで見ると加耶だけでなく百済(馬韓)の影響が意外に大きいなど、集落構造の研究で是正できる。